

登場人物

六兵衛

赤兵衛

爺さん

子供たち

人間たち

一場

◆四国の里山。子狐・六兵衛が人間の子供を見かける。
◆ナレーター、六兵衛、子供たち

四国のある山の中に、おもしろい狐がすんでいました。

いつも、ひとりで歩くことが好きでしたが、ある雨の日、いつものように餌をあさってぼつぼつ歩いていきますと、男の子が四五人、がやがや話しながら山を下っていました。

狐は、時々人間をみたことがあったし、人間は二本の足で立って歩いているので、狐は珍らしくて仕方がないので。狐のおかあさんは、「人間のところへ行くといひどいめにあうから、人間のところへぜったいに近づいてはいけませんよ。」と、いつもいのですけれど、狐は、人間の姿がおかしくて仕方がなかったし、第一、ひよろひよると、立って歩いているのがおかしくてしかたがないのです。狐は子供たちのうしろからそっとついて行きました。

子供1 「このへんは六兵衛狐の出るところだぞ。」

一人の子供がいました。

子供2 「昼間から出ることはないだろう。」

また一人の子供がいました。

子供3 「昼間でも雨が降っているから出るかもしれん。」

また、もう一人の子供がいました。

時々、とくで雷が鳴っています。

子供たちは、何となく気がわるくなったのでしよう、歩いてきた子供たちは、ふっと足をとめて耳をそばたてました。

すると、一人の子供がふいに後をふりかえって、狐をみました。

子供1 「あッ、狐が出おったぞッ。」

子供たちはびっくりして、まるで豆がはぜたようなすさまじい勢いで、走って山を下りはじめました。

狐もびっくりしました。どうしてあんなに子供達がさっと走って行ったのだろうと思いました。雨の降るなかを、狐もぬれながら、子供たちの後を追いかけてゆきました。

◆里に降りたところで、牛の赤兵衛に会う。
◆ナレーター、六兵衛、赤兵衛、爺さん、人間たち

細い山道をいくまがりもして、やっと、人間の通るらしい道の近くへ来ますと、山の田圃ぞいのところで、大きい牛がもうもうとないていました。

狐は自分たちよりも大きい動物をみて、しばらくあきれて眺めていました。何て大きいのだろう……。お尻は箱のように四角くて、骨ばっていたし、たれさがった腹や脚が泥だらけです。そしておもしろいことには、大きい鼻の穴にまあるいかんをつけて太い紐がついていました。

狐はおずおず牛の前へ行って、ていねいに頭をさげました。牛はびっくりして狐をみました。

六兵衛 「あなたはいつたい、どなたさまですか。」

と、狐がききました。

牛は正直者でしたから、わたしは、桑助さんの家の牛で、赤兵衛というものだところたえました。狐は王様のようだと感心しました。

六兵衛 「そうですか、わたしは山の中から来た六兵衛という狐ですが、このさきへは行かれますか。」

と、たずねてみました。

赤兵衛 「ええ行かれますとも、道はどこまでもつづいていて、にぎやかな河口までつづいていますよ。」

と、教えてくれました。

狐はていねいにあいさつをして、雨の中を歩きました。

しばらく行くと、小さい村がありました。村のとっつきの家では、
鶏にわとりが三びきほど遊あそんでいました。狐きつねは何なにも彼かも珍めずらしくて
仕方しかたがありません。これは何なんというものだろうと思おもいました。
それで、また、ていねいに頭あたまをさげますと、三びきのあわてもの
鶏にわとりはけたたましくなきたてて 鶏にわとり小舎こやの屋根やねへ 飛とび上あがって
ゆきました。

すると、家のなかから、おそろしく脊せいの高いおじいさんが
棒ぼうを持もって出でて来きました。

爺おやさん「これッ、狐きつねの奴やつめ、お前まえ、うちのとりを食くうつもりだなッ。」

狐きつねはびっくりしました。鶏にわとりなんか一度いちども食たべた事ことがないのに、

この人間にんげんは妙みょうな事ことをいうと思おもってほんやりしていますと、
こおんと固かたい音おとをたてて 狐きつねは額ひたいをいやというほどなぐられて
しまいました。思おもわず尻餅しりもちをついているところを、狐きつねはどうとう

人間にんげんにつかまってしまって、木箱きばこの中なかへいれられてしまいました。

その晩ばん、人間にんげんたちはこんなことを話はなしあっていました。

人間にんげん1 「六兵衛ろくべえ狐きつねというのはひどい奴やつで、五作ごさくさんの家いえから
かえる時とき、おれはおこわめしを みやげにもらって
いたんだが、祖谷いを下くだる途と中ちゆう、とうとう六兵衛ろくべえに
化ばかされて、おこわめしをぬすまれて、ひでえめに
あつたよ。」

人間にんげん2 「おれも、この六兵衛ろくべえには痛いたいめにおうたぞ、
妙正寺みょうせいじの番僧ばんそうに化ばけて、おれから財布さいふをとりあげて、
あげくのはてに、河かわの中なかへつつきおとされてしまった
ものな……。」

六兵衛狐は、箱の中で、こんな話をきいていてびっくりしました。人間というものは何という嘘つきなのだろうと思いました。

六兵衛狐は、いままでにまだ一度も里へ降りたことはなかったし、第一、人間のようなかしい動物を、化したりなぞしたことは一度もなかったのです。

人間は おかしなことをいうものだと思います。昼間、頭をなぐられたところに、大きなおぶが出来て、それが痛くて仕方がありません。山の中へ早くかえりたいと思いました。こんな嘘つきのところにいると何をされるかしのれないので、狐はだんだんこわくなってしまいました。

人間3 「おれのところでは、鶏をもう二度も六兵衛に食われっちまったんだからな……。」

人間4 「狐ぐらい動物のうちで悪い奴はないのう。あれは魔物だからなア。雨の降る晩は、かならず山に灯をつけてからかうし、ろくな事をせんぞ。二三日、六兵衛はひぼしにして、腹をきれいに干して、いっぺん狐汁でもしてみんなで食おうじゃないか。」

人間5 「うん、狸汁はうめえそうだが、おれは、狐汁というのは始めてだ……。」

狐はびっくりしました。急にお母さんがなつかしくなり、涙をいっばいたため息をころしていました。

夜が更けてから、狐は一生懸命に箱の蓋をもちあげてみました。石でもものっかっているとみえて、蓋を持ちあげるとき、ごろごろと石が少しずつ動いている様子です。狐は根気よく

蓋ふたを持ちあげて、とうとう長いことかかって 扇子せんすがたに、箱はこの蓋ふたをずらすことが出来できました。そっと首くびを出だしますと、あたりはうすぐらいのです。かすかに障子しょうじの破やぶれから 月つきの光ひかりがさしている様子ようすなので、狐きつねは やつとの思いおもいで土間どまへ はい出だす事ことが出来できました。

人間にんげんは とてもおそろしい動物どうぶつだとお母かあさんがいつていたけれど、本ほん当とうだと思おもいました。だから、自分じぶん達の仲間なかまは 昼間ひるまは 穴あなの中にひっこんでいて、人間にんげんにみつからないようにしているのだなと思おもいました。

狐きつねは 土間どまへ出でて、縁えんの下したからそとへ出でることが出来できました。まんまるいお月つき様が 高たかくのぼって、山やまの方ほうで なつかしい 梟ふくろうの啼なく声こえがしています。

祖谷いの山やま々やまが、こんもりとしていて、六兵衛ろくべえよ、お母かあさんがとても心配しんぱいしているから、早はやくかえっておいでといっているようにみえました。狐きつねは 急きゅうにおながへってきましたし、頭あたまのこぶは、しいたけみたいに大きくもりあがっていて とても熱ねつをもっていました。よろよろと歩あるいていますと、ある家いえのところ、もう、もう、もう、と、牛うしが啼ないていました。

六兵衛ろくべえ 「ああ、桑助くわすけさんの家いえの赤兵衛あかべえさんだな。」
と、狐きつねが牛小舎うしごやの前まえへ来きて

六兵衛ろくべえ 「こんばんわ。」
と声こえをかけました。

すると、眠ねむれないでいたとみえて、赤兵衛あかべえは口くちをもぐりもぐりうごかしながら、

赤兵衛 「ああ、こんばんわ。どうしました。河口まで行って見たのかね。」

と、やさしく牛はたずねるのです。

狐はひどいめにあって、いままで箱の中にいた話をしますと、

赤兵衛 「それは気の毒でしたね。人間というものは何とも勝手なもので、わしらのようなものまで、尻をひっぱたくのだからいやになるのさ。わしだって、たまには、からだのだるい時もあるのだが、何にしても、一日も無駄には やすませてくれないでねえ……無理な仕事をする時、わしは時々、泣くこともあるのさ。いくらこんな生れあわせだといっても、これも神さまのおぼしめしで、こんなものに生れてきているのだもの、一つだってわしは悪いこともしたことはないのに、尻をぴしりツぴしりツとむちでなぐられる時は、つくづく泣きたくなってしまうよ。生れあわせで仕方がないけど、お前さんのように身軽るに山の中で自由に住める身が うらやましいさ……。」

と、いいいます。狐も何だか牛がかわいそうで仕方がありませんでした。

六兵衛 「ほんとに赤兵衛さん、そうですね。わたしたちだって、人間だって、そうながくは生きられないのだから、嘘なんかいわないで、たいらに世の中をくらしたら、それが一番いいですね。あなたは、さつきから口をもぐもぐしています、何をたべているんですか。」

赤兵衛 「別に何もたべてはいないので。夕方たべたわらをいま食べなおして、胃からもどしているんです。」

六兵衛 「今夜はいい月夜ですね。」

赤兵衛 「ああ、わたしは夜が一番楽しみです。人間がねてしまうと、もうわたしはひとりで何を考えてもいいのですからね。尻をひっぱたく人もないし、一番楽々としみます。」

狐は ほろりとしました。こんなに王様のようなからだをしていても、自分たちよりつらいことがたくさんあるのだなと同情しました。

六兵衛 「わたしは、このまま山へかえってしまえば、もう二度と里へはおりて来ませんけれど、元気でいて下さい。そのかわり、夜の夜中に、山の上で、わたしは時々うたをうたってあげましょう。あああの時の六兵衛狐は元気だと思っして下さい。——ほら、かすかに梟がないているでしょう。あの木のそばにわたしの巣があるのです。きつときいて下さい……。」

六兵衛 狐は、気のいい正直者の牛と別れて、淋しい山道を祖谷の山の中へいそいそと登ってゆきました。

六兵衛 「ああ助かってよかった。何といっても自分の天地が一番いい。おかあさんはどんなに喜んでくれるだろう。」

六兵衛は 腹のへったのも忘れて、まるで飛ぶようにしてお山へかえりました。昼間の雨は かりりと晴れて、まるで昼のように明るいお月様が山や森を照しています。

それから毎晩、狐は 里に近い岩鼻の上に出て、赤兵衛に

きこえるように、

六兵衛 「こおーん、こんこん、こおーん、こんこん。」

となきました。晴れた夜は、村じゅうに、六兵衛のなく声がよくひびいてきこえたそうです。

〈完〉

Podcast ののラジオ 好評配信中！



視聴・購読はこちらから
<https://gekidannono.com>

ご意見・ご感想はこちらへ
radio@gekidannono.com

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。

みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでいただけるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。

いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作などのあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください。

劇団ののと読む名作文学 林芙美子 『狐物語』 Podcast 版

発行日 令和 2 年 12 月 19 日

著 者 林芙美子

編 集 劇団のの

発 行 劇団のの

[https://gekidannono.com/
radio@gekidannono.com](https://gekidannono.com/radio@gekidannono.com)

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。

ゴシック体のルビは、原文に振られていたものです。

底 本 『童話集 狐物語』国立書院

初 出 1947 (昭和 22) 年

図書カード URL

<https://www.aozora.gr.jp/cards/000291/card24373.html>

